

『ドン・カルロス』論

——サン・ヒレアルにおける「歴史」と「小説」のかかわりについて——

萩 原 茂 久

Nouvelle historique の術語公認

ラ・ファイエット夫人が『モンパンシエ公爵夫人』を出版した一六六二年よりも十年遅く、また同じ作者が『クレヴの奥方』を発表した一六七八年よりも六年早く、つまり一六七二年に、サン・ヒレアルは『ドン・カルロス』を世に出したが、この作者とこの作品とは十七世紀の小説の方法の流れにおいて、疑いなくひとつの焦点を形づくるものであった。

ラ・ファイエット夫人の作品に、メモワール作者・記録作者としての姿勢が影を落としているように、『ドン・カルロス』には歴史家としてのサン・ヒレアルの思想と方

法が息づき、私たちの関心を呼ばないではいられない。

アベ・ドゥ・サン・ヒレアル (Abbé de Saint-Réal, Césard Vichard) が一六三八年と四四年のあいだに生まれ、没年が一六九二年である点を考えてみても、一六三四年から一六九三年への生涯を送ったラ・ファイエット夫人と、ほとんど同時代の空気を吸って生きたことにまちがいはないのである。晩年はサヴォワ家の文字どおり史料編纂官に任ぜられたサン・ヒレアルは、『歴史の効用について』 (*De l'usage de l'histoire*) (一六七一年) をほとんど社会的処女作として発売した、全的な意味ではないにしても、まさに歴史家だったのであって、『ドン・カルロス』が題名を構成する一部として、「歴史中編小説」

Nouvelle historique の語をかかげ、それが「専門術語」⁽¹⁾化したことは、ルネ・ゴデンヌの調査でも明らかにになった。

すなわち、それまでは、とくに中(短)編小説を意識したものでは、Nouvelle galante⁽²⁾ あるいは同じものを意味する Nouvelle の語を含んだ題名の作品が出版されていたのに対して、『ドン・カルロス』によって世の公認をえたからであろう、とりわけ一六七五年から八〇年にかけて、Nouvelle historique の語を題名に含む作品がいくつも見られるようになったのである。

ラ・ファイエット夫人の作として、死後に出版された『タンド伯爵夫人』も、それを題名に含んでいるという事実がある。この作品は執筆年代が不明のため、これまでかすかすの研究자들이推定をおこなってきた。それについては私も、『タンド伯爵夫人』の晩年の色彩について——その執筆年代推定と作品分析⁽⁴⁾——で触れなければならなかったが、もし Nouvelle historique の語を編集人が出版人がつけたものでないことが実証されるなら、現在いっけん有力とされている説——この短編は『モンバンシエ公爵夫人』と同じころか、近い時期に書

かれた——との推定はたちまち崩れ去ってしまう。私は三つの根拠により後期執筆説に加担したが、それは『クレヴの奥方』以後の時期をさしている。サン・レアルの『ドン・カルロス』に刺激され、またその歴史家意識を重要視することによって、Nouvelle historique をなさん人も作家が世に出したが、それは一六七〇年代後半から一六八〇年代はじめのころに集中していたことを考えると、『タンド伯爵夫人』の執筆も同じ年代の範囲内と推定できないこともない。すなわち、『クレヴの奥方』の後半あるいは終わりの部分の執筆とかさなるか、またはその直後から一六八〇年代初期というふうに、この術語を指標とすることもできるわけである。⁽⁵⁾

さて、作品『ドン・カルロス』が成功だったことは、Nouvelle historique の術語公認によってもたやすく推測できるが、その問題とは離れて、ラ・ファイエット夫人の『クレヴの奥方』執筆時に、実はこの『ドン・カルロス』が座右に置かれた可能性を指摘する研究者があり、私はそれに注目する。つまり、アンリ・クレーはつぎのようにいう——「『クレヴの奥方』にある」事件は(『ドン・カルロス』にあるものと)同じ時代に属し、

王女エリザベート・ドゥ・フランスや、その結婚・その不吉な運命への暗示を含み、とりわけ、宮廷生活についての同じ画像と、恋愛情念についての同じ不幸観とを提供しているのだ⁽⁶⁾——

さらにクレーは、『ドン・カルロス』と、同じ作者による『ヴェネツィア共和国に対するイスパニア人の陰謀』(*La Conjuración des Espagnols contre la république de Venise*) (一六七四年) のいくつかの場面とメタフォールとが演劇的性格をもつために、オトウエイからシラアに至るすぐれた劇作家たちの靈感を揺すぶったことを述べたあとで、バロック期の大小説からきている『ドン・カルロス』の数個の主題が、ふたたび『クレーヴの奥方』に現われる事実⁽⁷⁾に触れている。

それらの主題とは、「騎上槍試合」「敵対者の策略」「証拠記録の窃取」「男主人公の死かと思われる事故」「その瞬間思わずも女主人公が洩らすひめごと」などであって、このような旧体制的小説の主題を思いついてラ・ファイエット夫人に書かせる決心をさせたのは、『ドン・カルロス』の成功によるのかもしれないと考えるのは、必ずしも不自然ではないであろう。しかし、ひとりの歴史家

や一編の小説だけを参照したのだとはいきれない『クレーヴの奥方』にとつては、サン・レアルも、ブランドムやメズレエら数人以上の歴史家・年代記作者のひとり、ヴィルディウ夫人までも含めた前代・当代の小説家や劇作家のひとり、と考えた方がよいかもしれないのである。

真正な歴史家としての手づき

バロック期(ほぼ十七世紀前半を占める時代)の大河的長編小説が神話の時代や、ギリシア・ローマの歴史に材を求めた(しかしフィクションは歴史に束縛されにくかった)のに対し、古典主義期の中・短編を中心とする小説群が、比較的新しい一世紀まえの、しかも遠隔の地ではないフランス(あるいはその周辺を含む地域)を背景として選んだ事実は、読者の愛好心の移りゆき(絵そらごと・ロマン性・様式美・理想主義・英雄主義から、事実・記録や歴史性・レアリスム・普遍的情念分析や人間探究・悲観主義——への)が基礎となつて生じたのはちがいないが、作者の側にも価値観や美意識の変動が生じていたことであろう。作者の側の新しさが作品とな

って結実することによって、読者公衆の好みをリードする面の大きいことも否定できない。

サン・レアルの『ドン・カルロス』は、その意味で作者の歴史家意識が単に色彩的に全編を染めあげたばかりでなく、動かすことのできない方法として、作品を制御している点から目をそらすべきではない。それがサン・レアルを、より以上に真正な歴史家として、自他ともに認めさせている最大の原因ではあるまいか？

作品のはじめには二ページにわたって、「意見」(Avis)と題された部分があるが、作者はそこで文献として参照したすべての歴史家・年代記作者、あるいは具体的な著作または古文書を挙げている。歴史家の名としては、ジャック・ドゥ・トゥー、オヴィニエ、ブラントーム、カブレラ、カンブラーナ、アドリアーニ、デュプレクス、マイエルヌ、メズレエ、ル・ラブルウルその他に及んでいるが、問題とすべきなのは「このうえなく特異で、このうえなく異常な個所については、そのページの余白に、引用したおもな著者を挙げておいた」⁽⁸⁾であろう。引用は後半の方が多くなるが、ひとつの個所についてひとりの著者ばかりでなく、ふたりが引用されている例もかなり

見いだされる。また、三人四人の名が挙げられたあとに、その他とあるのもあって、数人あるいはそれ以上の歴史家の存在が暗示されているところもある。

まず、フランドル地方の反逆者たち(新教徒軍)の指揮官になるために、ひそかにイスパニア宮廷から逃走をくわだてるドン・カルロス王子が、自分の寝室に武器をかくす個所を挙げよう。

「ベッドわきの壁ぎわに、銃火器類がいっぱい詰まった大箱をひとつ置かせたうえに、他人から見られずにつも携帯できるように、新発明の小型ピストルをも作らせ、就寝中にいきなり踏みこまれないように、(中略)有名なフランス人職人に命じて(中略)錠前を作らせた」⁽⁹⁾

この個所に対するものとして、ページの下段欄外余白には、ドゥ・トゥーから引用したとして、その名が示されている。

第二の例は、幽閉した牢獄でドン・カルロスをひそかに刑死させた父王フェリーペ二世が、息子との関係を疑ってきた王妃に、その死を知らせる場面である。

「(ドン・カルロスの死を伏せておいた時期、国王は王

妃が出産するときを選んで、彼女にこのことを知らせようと心に決めた。この状態のからだの苦痛に、激烈な精神のショックを加えてやれば、復讐は完べきものになる、と国王は期待したのだ。しかしまもなく、自分の望む以上に王妃がよく事情に通じているのを知った。ドン・カルロスは父親の嫉妬の犠牲になったのだということを、王妃は知らないはずはなかったのだ、抱いている恨みをあからさまに国王に示した。彼女の無理のない怒りは夫を新しい不安に落としこんだ¹⁰⁾。

この個所については欄外に、ル・ラブルゥルと、マイエルヌの名がしるされ、さらに「その他」の語がある。もっとも多く参照歴史家名が見られる例のひとつは、ドン・カルロスを幽閉したのちの国王やその補佐役の大臣たちが、日ごと高まる人民の王子への同情と期待をまのあたりに見、王子を自由にしたなら自分たちの安全は保証されないの、彼を死なせることで恐怖からのがれようとして、「しばらくのあいだ、ひとびとは王子の食事に、やがて死につながる衰弱をひきおこすはずの、緩効性の毒物をまぜた。また、衣服にも下着にも、ひろく王子のからだに触れるものすべてに、同じ毒を染みこま

せた⁽¹¹⁾」の個所であって、ここには、ドゥ・トゥー、ル・ラブルゥル、マイエルヌ、デュブレクスの名がある。

学問研究の書にすらも、このような手づぎが習慣化していたとはいえない当時において、「小説作品」にこのような現象が見られるのは驚くべきことではないのか？ しかも真正な歴史家であることの自己証明の努力は、この丹念な引用歴史家名を示す注だけにとどまらない。

つまり、小説的効果がどうであれ、ふたつの仮説あるいは推定が存在するところでは、それらを慎しみぶかく、客観的に投げ出している点に注目すべきである。二つの例をここに引用しよう。その第一は——イスパニア宮廷で、しだいにフランドル征戦を決意して行くというか、その決意に追いこまれて行くというか、ドン・カルロスが焦慮の日日を過ごしている、ある一時期の段階である直前、折りよくもといべきか、グラナダで有名なモール（ムーア）人の反乱がおこった。オットマン帝国の重臣にのしあがっていたミケは、昔のフェリーペ二世への恨みをはらす機会到来とばかり、グラナダに艦隊と兵器を送って反徒を救援する計画を立てた。ミケはフランド

ルともつながりを持ち、このためフランドルの反徒たちも喜び、すでに彼らのために参加するという決意表明の手紙がドン・カルロスから送られてあったので、そのことはフランドルの長老会議から、すでにミケのもとに通知された――

「カルロス王子にできるだけ信頼を示そうと、ひとびとは彼に至急便を送り、ユダヤ人（ミケのこと）と通信するための暗号を知らせたが、もしドン・カルロスが共通の利益のために適当と判断したなら、王子自身がコンスタンティノーブルで交渉できるようにするためだった。王子はもっと安全性が強固になるのを願って、グラナダ地方に接岸する予定の例の艦隊を、フランドルの海岸にまわしてもらいたかった。そのむねトルコ宮廷に書き送ったところ、ミケはつぎのように返事をした。王子の希望のことはなんでもするよう、艦隊は秘密命令を受けております、と。ことがミケのいうとおりであったにせよ、あるいは、どんな犠牲を払っても決行しようとの決意をさせるため、ドン・カルロスにただそう信じこませようとしただけのことであつたにせよ、とにかくミケはそう返答したのだった」⁽¹²⁾（傍点筆者）

さらに、王妃が安産のためと称してくすりを服用せられる場面こそは、その結果死を招くのだから、この問題にかかわる最高の例となろう。

「（前略）アルバ公爵夫人がある朝、くすりを手にもつて王妃の部屋にはいった。自分の健康状態はよいから、それをのみたくはない、と王妃はいった。が、公爵夫人が服用を強制しようとしたとき、速くにいたわけではない国王は、いい争いの騒ぎに割ってはいった。はじめ彼は公爵夫人の態度を頑固だといって非難した。が、王妃の無事出産には必要だとの医師の判断があることを了解させられた彼は、医師の權威に従った。国王は王妃に対してきわめてやさしい調子で、このくすりは大へん重要なものだから、当然服用すべきだといった。あなたさまがそれをお望みですから、わたくしもそれを望みましよう、と王妃は答えた。国王はすぐに部屋を出たが、彼女がどんな状態であるかを見ようとして、しばらくして正式な喪服を着てやってきた。しかし、この飲みぐすりの調査にある種のまちがいがあつたのか、あるいは、王妃がおちいっていった異常な感情状態と、それを服用するときの自棄的な態度によつて、毒ではないはずの薬品が毒

性的に作用したのが、彼女はその日のうちに、はげしい苦痛にのたうち、ひどい嘔吐をくり返したのち、息を引きとった。子どもは死児として生まれ、頭がいほとんど焼けこげたように黒変していた⁽¹³⁾ (傍点筆者)

この部分では、「正式な喪服を着て」の個所について、マイエルヌとベレーズからの引用であることをことわっている。この事項までも考慮に入れると、王妃の死は(一)国王みずからがもくろんだ復讐としての毒殺、(二)医師が悪意からではなく、薬品の調合をまちがえた結果の事故死、(三)王妃の異常な心身の状態が大きく作用して死に至った——の三つの推定原因を作者はそのまま投げ出し、ラ・ファイエット夫人の記述した「王弟妃の死の報告」にある客観性に、大きく近づいてくる。そこには、毒を盛られたと叫びながら、のたうちまわる王弟妃と、それを、してはならない邪推だとなだめ、天命を心静かに、りっぱな態度で受け入れるよう説得するまわりのひとびととを描写する、ラ・ファイエット夫人の冷静な態度がある。

サン・ピレアルもそれ以上に冷静だということができ、作品の全体にわたって芸術的な配置・配列に意を用いる

こともなく、直接話法などもあまりに数少なく、読者を興奮させたり、その好奇心を刺激しようとする意図が欠けている状態は、すでにクーレによって指摘されていないではないが、さらに私の気づいたところでは、いわゆるプレシウ的な言語美学からきているといってよい、具体的な事件や行為を表わす暗示的・儀礼的・抽象的な文体の多さが、この作品の知的な性格をいっそう高めている。

心理分析の「自然らしさ」と「バロック性」

あまりにも客観的で冷静で、抽象的ですらある『ドン・カルロス』が、それでも小説であることを私は証明しなければならないが、それはけっしてむずかしいことではない。真正な歴史家としての記述の、正反対の極にあるものは心理分析だと考えるからだ。森鷗外の「史伝」にまで徹底化すれば、登場人物の心のなかに分け入ることも差しひかえるだろうが、外的な事件や行動とはちがって、心のなかには触知できないものである。そこでどのような分析がおこなわれようとも、肯定できない場合でも、否定もできないのである。作者はそこで、

心理分析を「つくり出す」ことができる。

この作品は章分けもなく、段落さえも少ない形で書かれている様子は、*Nouvelle (historique)* の語を題名に含まなかったとはいえ、まさにそれにふさわしい『モンパシエ公爵夫人』と似ている。が、くわしく検討してみると、作品構造的には二つの部分に分けることができる。すなわち「ベアルヌ陰謀事件」の前と後とである。心理分析はもちろん後半にもあるが、前半の方が量的に多く、このことに呼応するかのように、前半には引用者名の注が非常に少ない。だから全体的に見て、「心理」は因果的に前半において構成しおわり、「ベアルヌ陰謀事件の失敗」により、それらの心理が歴史的・外形的に証明される形になっているといっても過言ではない。

—— 古典的心理小説特有の基底構造 ——

大まかにいえば、この作品は王子ドン・カルロスと王妃エリザベートの悲恋物語りではあろう。しかし、「心理（分析）小説」としての基本的な条件がととのっていることを、まず最初に見る必要がある。それは三角関係の構図であって、「愛なくして結婚した夫と妻、および妻が結婚まえに愛した（知っていた）恋びと（愛人）」

という図式にほかならない。『ドン・カルロス』においては、それはイスバニア王フェリーペ二世と、その王妃（アンリ二世とカトリクス・ドゥ・メディシスの長女）、およびドン・カルロス（国王とその最初の妻マリ・ドゥ・ポルテュガルの息子）となるが、この三者の関係は政治（戦争を含めて）の力の産物にほかならなかった。

神聖ローマ皇帝カルル五世は、引退を決意したときに、息子をアンリ二世の勢いにさらしておくのを心配、フランス王とのあいだに五年の休戦条約を結んだが、その期間にマダム・エリザベートとドン・カルロスとの結婚が提案されたわけである。それは政略的な意図によるものにちがいがなかったが、当のふたりは正式に会わないうちから、愛しい、慕いあうようになっていた。今日の見合い写真にあたる「肖像画」が王子の手には渡っていたが、それは王女の美の評判を裏づけたものだった。

王子も王女もこの結婚を心待ちにしていたあいだに、休戦は破られてしまう。法王の要請を受けたロレーヌ公らが動いて戦争が始まったが、アルバ公が圧制をおこなうフランドルを解放できず、フランス側の犠牲は大きかった。弱い立ち場のフランスは、ル・カトオリカンブレ

(15)ジでの平和条約を呑まなければならなかった。

「休戦が破られたときのドン・カルロスの苦悩はどれほどだったか、ふたたび平和のための交渉がされたときの彼の喜びはどれほどだったか、容易に判断されよう。が、これほど彼の希望を甘く揺すぶったこの平和が、実は彼の希望を永遠に葬るためのものだったとは」(16)と作者が書く理由は、この間に二度目の妻イギリス女王マリを失ったフェリーベ二世が、息子の(以前の)許婚者を自分の妻に、と要望したからにはかならない。王位継承者の弟しか生む可能性のない結婚より、若い、同年齢の王太子そのひととの結婚の方が喜ばれたのはいうまでもない。が、フランス側の立ち場は弱く、これをじょうずにことわることができなかった。

ここにおいて、「政略的に結婚させられた、愛のない夫と妻、および妻のもと許婚者」という三角形の図式ができあがり、古典的心理小説の基本構図にひとしいものが作品の底に敷かれたことになる。

——主人公たちの初期の心理——

三者の初期の心理がどのように分析されているのかを見るのも、ここが必要となってくる。ドン・カルロスが

許婚者と決められたときに、王女の心では何がおこったか。

「(前略)王女は自分にと考えられた未来の夫に対して、非常な〈尊敬〉(estime)を抱いた。その若い心はなにものかに愛着するこの機会を見いだして、ひそかに〈快いたのしみ〉(agréable amusement)を味わうようになり、知らず知らずのうちに彼女は〈愛情〉(inclination)の域にはいりこんだが、それは相手の徳への信頼よりは、それ以上の強さの苦痛を感じさせたのだ」(17)

クレールヴの奥方の前身シャルトル嬢がまだ婚約中に、クレールヴ公に対して「尊敬」を感じていたように、エリザベートもドン・カルロスに同じものを抱くが、シャルトル嬢がその域よりさきに進まないのとはちがって、王女は愛する対象を待ちうける心の空虚な場所を、そのままなおに満たすことができ、「快いたのしみ」を味わえるが、これはいかにも「自然らしさ」「ほんとうらしさ」の見本のような分析だといえる。その段階をへて「慕う」という意味合いを含んだ「愛情」に無意識のうちに踏みこむが、それは「恋愛情熱」(passion)の前段階であり、当然(クレールヴ公が指摘したように)「いら

だち」「不安」「苦痛」にともなわれる、恋愛情熱のあわい鏡でなければならぬ。

しかし、必ずしも単純な比較は許されないであろう。シャルトル嬢とはちがつて、エリザベートは未来の夫にまだ会えないのであり、氣がるに通信が許されるような条件のうちにあるのでない。とはいえ、とにかく女主人公は恋愛心理という敷かれたレールのうえを、走りはじめたことだけは認められる。

つぎにカルロス王子も同様、運命に満足し、噂や肖像画が王女についての好ましい心象を与えたので、「その考えが心に呼びおこした恋のすべてに、喜んで身をゆだねた」⁽¹⁸⁾のであった。ところでこの個所では、箴言に似た文体が心理の「ほんとうらしさ」「普遍性」「一般性」を強めている。「それ(肖像画)はたいそう似ていると保証され、ドン・カルロスはたやすく信じた。というのは、彼がそのことを願ったからだ」⁽¹⁹⁾というふうには、

ドン・カルロスは肖像画を眺めながら、その対象について自分の考えていることを、相手に知らせるあれこれの手段を頭に浮かべるが、そのあと王子の心理として、「彼女をわがものにできるといふ希望によって、自分

の魂のなかにひろがる喜びを、相手が知らずにいる——そのことに彼は堪えられなかった」

「ときおり王子は自分の幸福に恥辱を感じ、相手が自分に心を捧げなければならないまに、この王女の心を獲得したい、それだけの時間がほしい、とできれば願ったことだろう」

「でもそれはできない相談だったので、少くとも自分のさまざまな考えを相手に知らせられたら、満足しただろうと、彼には思われた」⁽²⁰⁾が述べられるが、ここには政治が恋愛心理のうえに落とす影が色濃くあらわれている。この喜びは政治・政略によってもたらされた。しかし同時に、幸福をもたらした原因が政治・政略であることに、王子は恥辱を感じる。時間と交際の自由さという、政治が許さないものを求める心は、相互的な愛情による幸福な結婚を目ざす純正なものにちがいない。

恋愛結婚という、個人の自由な意思の発現を許さない政治状況は、そのまま瞬時にして、「僥倖」を「晴天のへきれき」に変えてしまうのだ。

宮廷人たちのまえではこの「晴天のへきれき」(父がエリザベートと結婚することになったというニュース)

によるショックと動揺は、王子が「しっかりと自分をおさえたので」⁽²¹⁾、だれにも感じとられずにすむ。愛と狂気がひきおこす激情の風は、王子がひとり部屋に退いたときに吹きすさんだのはいうまでもない。しかし運命の現状からは何も解決せず、何もくわだてられないのである。「王子の絶望は知らず知らずのうちに、メランコリイに変化していった」⁽²²⁾のは当然であらうし、自然らしいものである。

父王への憎しみの人生がそれによって始まるが、興味をひかれるのは、フェリーペ二世のあまりに単一な心理である。——「父の方はほんとうの理由がわからず、自身のありかたから息子を判断して、この若い王子の悲しみは、早く王になって治めたいと思ういらだちから、きているのだと考えた」⁽²³⁾の文からすれば、イスパニア国王は「野心」という一情念の象徴であって、このような象徴的存在はどうしても、それを尺度とした分析以外には受けつけにくくなってしまふ。

気がすまないために、できるかぎり出発を遅らせ、国境紛争で中途滞在などもあって、ようやくイスパニアにはいった王女は、出迎えにきたドン・カルロスと会う。

接近の第一報で彼女は、心理分析を超えて「失神」⁽²⁴⁾してしまい、王子がそばにくるまでわれに返らない。

ドン・カルロスの心理については、十七世紀流の情念論にしたがって、まず「アドミラシオン」がおこる。つまり、相手の「美しさに茫然とする」⁽²⁵⁾が、その衝撃のつぎの段階には、考慮と予見によってそれが別の情念に変化してしまふ。相手は自分から失われてしまったのだと考えることで、「苦痛」が、これからさきこの存在が自分に耐えしのぶ日日を送らせるだろうとの予想によって、「恐怖」が、「アドミラシオン」に交代するのである。⁽²⁶⁾この「衝撃」——「考慮あるいは反省」の構図は、『クレイヴの奥方』で、とりわけ女主人公の心理分析にくり返し現われる型ともいうべきものであって、古典主義小説のひとつの特徴といってもよいと私は考える。

王女を迎えて馬車に同乗した王子は、マドリッドに向かうしばらくのあいだ、相手をじっと眺め、心にある思いも一部述べることでできたようであって、その結果「彼はあまりに心を揺する喜びを感じたので、しばらく父の幸せとわが身の不幸を忘れたほだった」⁽²⁷⁾が、エリザベートが王妃となりおわってからも、ドン・カルロス

が王妃の部屋に熱心にかよう理由となつたのが、また、のちに決起をしきりにうながすフランドルの貴族たちに對して、ためらっているうちに時機を失う理由となつたのが、この王妃に会うことの喜び——王妃から離れるのをいとう心——であつたのだ。

マドリードでの国王とエリザベートとの初対面の儀式のときから、後者の困惑と動搖、それを自分の白髪のせいだと思ふ前者の悲しみを感じとる周囲のひとたちは、わるい前兆を、つまり「これほど違つたふたりの人間の結合が幸せであるはずがない」⁽²⁸⁾との判断をくだすが、イスパニア宮廷全体がかつてない「アドミラシオン」におちいる、新王妃の美と優雅さの魅力は国王を魅了しないわけではない。

しかしフェリーペ二世の外見と内心とはあまりに差がある。自分の幸せを内だけに封じこめ、少しの弱味も妻に知らせないことが偉大さだと判断する国王は、「通常満ちたりた恋愛感情につきものの、快い奔放さからあまりにもへだたり、あまりにも外見的にやさしさの足りない振る舞い」⁽²⁹⁾をするが、これは愛し合うはずの新婚夫婦の生活の理想からは、かけはなれてしていると王妃は思うの

である。彼女は夫を「からだを所有しているだけの男」⁽³⁰⁾、「野心と、政治についての考慮しか眼中にない男」⁽³¹⁾とみなすほかはない。しかしながら、「相手からあまりにはげしく愛されたので、官能の喜びは彼女の恋愛情熱を減らすどころか、増していった」⁽³²⁾の記述に注意を払う必要がある。

王妃の肉体的快樂を含む新婚生活を想像するとき、ドン・カルロスの心は不安におとしこまれる。だから、国王が父皇帝の遺体と対面するため、宮廷が旅に出た美しいエストレマドラ地方の、オレンジ林で夜なか、王子は王妃に接近する努力をせずにはいられない。

——創造された人物と「パロッキ性」——

作品の中ごろや後半での、主人公たちの心理分析は自然である。国王も王子も、「恐怖」と「不安」から最後の行動へと追いつめられて行く。王子は王妃との連絡役を選んだ腹心の「ボザ侯爵暗殺事件」——王妃も侯爵もたがいに関心をもち、ふたりの愛の噂を信じた国王がひそかに暗殺させた事件——によって、自分の秘密計画が暴露されたと思ひこみ、父には無断でフランドルへの逃亡を決行するほか道はないとの心境に追いこまれる。国

王もまた、疑心暗鬼や、それにつけこむ重臣たちの、その、かしと証拠めいたものの提示により、王子を殺さなければ自分があやういとの、恐怖と戦り、つを高めて行く。これらの心理分析が自然らしく、古典主義的なのは、間けつ的な漸層法をとるからであろう。

しかしここに、宮廷という陰謀と奸計の舞台に、あまりにもふさわしいふたりの人物がいる。財政と裁判をつかさどる大臣ルイ・ゴメの妻エポリ公爵夫人と、皇帝カルル五世の私生児というドン・ジュアンである。後者は王妃をめぐってドン・カルロスのライヴァルとなるし、前者は王子やドン・ジュアンをめぐって王妃のライヴァルとなるが、陰謀と快楽にかまける彼らは、けがれて卑小な影を帯びる、マキャヴェリスムの一種の象徴となる。政治的陰謀のためには恋愛情念を策略化するのになんのためらいもなく、卑劣なスパイ行為も平然とおこなうとき、劇としての遊びと喜劇性はたしかに高潮するが、この「バロック性」は作品全体に必ずしも融解せず、ある程度浮きあがった印象を与えずにはおかしい。しかしこの不審は、これら二人物が実は作者の創造によるもの⁽³⁾と知ったとき、私の心から消え去ったのであった。

美德としての「秘密の保持」、および「秘密の暴露」
——ラ・ファイエット作品との類縁

恋愛情念が父と子との相剋の遠因とするなら、政治がその揺るがすことのできない近因であって、それは旧教と新教の信仰の違いがからまりながら、イスパニアとその周辺を含む地域での、父と子の政治上の対立になって行く。『クレヴの奥方』では心理のドラマが宮廷記録——政治状況からしだいに独立してゆき、個人の心にだけ左右されるものとなるのに反し、『ドン・カルロス』は見かたによっては、政治上の対立事件にもっぱら力点を置いたものであって、心理のドラマは添えものとしての重みしか感じさせない。だから、父と子が恋愛上のライヴァルになったから、その結果として政治上のライヴァルになったという展開も説得力が絶対的な強さをもたず、むしろ生まれながらの傾向と後天的な教育が、(宗教信仰を含めて)政治上の立ち場の差となって表われてきたと考える方が、作品の效果に忠実であろう。

祖父カルル五世へのドン・カルロスの尊敬は、晩年祖

父が退いた修道院で、改革思想に傾倒していた事実の暴露を機に、父フェリーペ二世への憎しみを生みだす。文字どおりの武人であった祖父は、いままで自分が殺してきた多数の新教貴族への懺悔と、彼らの信仰に殉ずるりっぱな態度への尊敬から、しだいに旧教信仰への疑念を強めたのだ。ところが、むしろ権謀術数と陰湿な情念で世を渡るフェリーペ二世は、カル五世の死後の名譽を守ろうとせず、非常に積極的にはなかったにしろ、宗教裁判所に媚びを売ってしまった。純粹なドン・カルロスは怒り、宗教裁判所の無礼と、父の弱腰を非難した。宮廷生活においては秘密の暴露は政治生命にとどまらず、文字どおり生命の終わりのかもしれないのであって、秘密の保持は俗世的な美德の第一のものと考えられていたといってもよい。過失による秘密の漏洩や、スパイ行為による秘密の暴露は、どれほど敵がたを有利にみちびくかわからない。陰謀と奸計の世界では、恋愛関係にしろ、政治的なつながりにしろ、秘密は守りきる必要がある。

秘密を守ることの美徳性を、ラ・ファイエット夫人の記録『王弟妃アンリエット・ダングルテール』くらい、

高らかにうたいあげているものはない。『クレヴの奥方』でも、「テミーヌ夫人の手紙事件」が秘密の漏洩・暴露について強調している点は大い。

『ドン・カルロス』では「ベアルヌ陰謀事件」こそ、秘密の漏洩によってみごと失敗したのだから、その意味では象徴的な位置を占める。——この事件は、軍事担当大臣アルバ公が、国王ともども計画した、新教徒の支柱となりつつあるナヴァール女王とその息子（のちのアンリ四世）を、軍隊を潜入させてベアルヌから奪い、イスパニアの宗教裁判所に引きわたすというもので、フランス宮廷側の内通者とも打ち合わせ、実行責任者ドミニク隊長が決行まえの報告を国王にしに行ったが、途中病気で倒れ、王妃の召し使いに必死の看護を受けて病氣を治すことができた。しかし口をすべらした一言により、好奇心をもったいのちの恩人に拒みきれず、「受けた奉仕の代価として、その秘密を支払って」しまった。³⁴ ナヴァール女王の親密な友であるイスパニア王妃に、この召し使いがただちに報告したのは当然である。王妃はベアルヌと、母后が滞在するボルドオに情報を送り、こうしてベアルヌ陰謀事件は失敗に帰した——

クレイヴ夫人やヌムール公が自分たちの恋愛関係の秘密を守った(後者はしかし、相手の名は伏せたままだが、得恋を吹いちゃうした)ように、イスバニア王妃もドン・カルロスも固く秘密を守り、手練手管で探りに入るエボリ夫人やドン・ジュアンが、何も探ることができなかったのは、注目してよからう。

しかし、アルカラで落馬して危篤が報じられた王子に、王妃は心のありたけをこめた手紙を送り、これが王子をよみがえらせる力となったのはよいが、後日返却を求める王妃にとうとう王子が返さなかったその手紙が、のちに国王への裏切りの動かぬ証拠のひとつとなってしまう。つまり、王妃も王子も秘密の保持は完全でなかったのである。また、国王を風刺したドン・カルロスの創作『ドン・フェリーペ王の偉大で賛嘆すべき旅』⁽³⁵⁾(カルル五世とちがい、一個所にぬくぬくと暮らす父の覇気のなさをあざける内容)を書きつけたノート・ブックが、不注意な取り扱いからエボリ夫人にすり代えられ、のちに夫のルイ・ゴメの手から国王に証拠として提出され、これが息子への国王の疑念を決定的にしてしまう。

スパイ行為については、ドン・ジュアンによる王子の

寢室の銃器発見などがあるが、作品の中核に関係する最大のものは、イスバニア側のカトリヌ・ドゥ・メディシスに対するスパイ配置であろう。「ベアルヌ陰謀事件」の失敗は王妃の通報によるものとわかった結果、王妃との親密な関係から、当然王子がこの秘密を洩らした張本人だと疑われ、国王の信任を失いかけたアルバ公らの必死の復讐が始まるのである。

以上、「秘密の保持」「秘密の漏洩・暴露」など、ラ・ファイエット作品と精神的に通じあう点を述べたが、作品『ドン・カルロス』には、夫人の作には存在しないものがあるのに、注意を向けなければならない。

「宗教裁判所」と「人民」——ラ・ファイエット作品との相違

それは「カトリック教会」を恐怖的に代表する「宗教裁判所」と「人民」の力であり、その力の政治へのからまり合いである。国王の性格によるとはいつても、皇帝カルル五世の遺書のなかに疑わしい信仰思想があったことが外部に洩れたとき、毅然として父の名誉を守りきれ

なかったところには、当時の王侯に共通するアキレス腱がなかったとはいえない。

フェリーペ二世はローマ法王の教権につながる「宗教裁判所」を恐れたばかりでなく、「人民」の力をも恐れた。「宗教裁判所」をはじめ、国王の態度を見守っていたのにすぎない。国王がこれから統治するイスパニアに対して、皇帝と交渉のあった、改革思想が疑われる大司教、説教師、神学博士の三人を投獄することで模範を示したので、「宗教裁判所」を勢いづかせたのだ。しかし、なによりもこのことは「人民」を拍手させた。国王の信仰への熱意について感嘆させたのである。サン・レアルは書く——「このうえない絶対君主でも、人民の精神のなかでは、宗教信仰の権利ほど聖なるものと化した権利はもたない⁽³⁶⁾（後略）」のだと。

だから、祖父の栄光を擁護し、宗教裁判所の無礼を非難したドン・カルロスを、父王は「宗教裁判所」より以上に、「人民」の憎しみを考慮して首都から遠ざけたのであり、旅さきで落馬して医師が絶望を宣告した彼を、イスパニアの「人民」は悲嘆するどころか、「ドン・カルロスの不信仰の聖なる、そして明白な罰⁽³⁷⁾」とみなした

ほどである。

しかしいっぽう、その素朴な信仰心をよいことに、「宗教裁判所」はことごとくに「人民」をそのかし、煽動しているのではない。王子の残酷な事故がやはり同情をひきおこし、敵意がなだめられ、国王は息子をマドリッドへ呼びもどすことができる。

王子の逮捕・幽閉がおこなわれたのち、ドン・カルロスの部屋で発見された証拠物件——フランドルの新教貴族やナヴァール王らからの手紙が、国王の手から宗教裁判所にわたったのは、裁判所を指揮するスピノザ枢機卿の、王子が新教思想にかかわったかのデマ宣伝のために、またも「人民」が煽動されたからであった。しかし「人民」の情念はふたたび同じ軌跡を描く。「宗教裁判所」が禁固継続の判決をくだしたあと、国王らの毒殺計画の渦中に置かれた王子は、「不幸であるゆえに弁護してやりたくなる状態のひと⁽³⁸⁾」となったために、「人民」は彼の復権と勢力拡大を願って同情と期待を注ぐようになり、国王は反乱を恐れて、もはや首都を留守にできなくなる。(このような人民の動きが、かえって、秘密のうちに王

子の処刑をいそがせる結果となったが……)

ドン・カルロスの真の死因を知らされない人民は、王子の盛大な葬儀を喜んだが、葬列からいたたまれず抜けたスピノザ枢機卿に対し、はげしい罵声を浴びせかける。いまや、人民は枢機卿を、カルロス王子のもっとも危険な敵だとみなしているからにはかならなかった。

「宮廷記録」と「小説」のかかわり

「心理のドラマ」が「宮廷記録」から自由を獲得しながら、独立して行った『クレヴの奥方』に反し、『ドン・カルロス』は「心理のドラマ」が「宮廷記録」に封じこめられているという印象がある。登場人物はあくまで政治に左右され、自由な主体性はほとんど見られない。政治という環境はたしかに恋愛情念を宿命化する基底構造をもつが、それは「宗教裁判所」と「人民」を加えることによって、あまりにも厚い手ざわりの壁となり、人間はただ環境に揺すぶられるだけの存在となる。

歴史的事件や行事は、登場人物の心理や行動の舞台まわしの役をするというよりは、歴史的事実(あるいは歴史家がそう述べているもの)の、一般に狭い間隔で並列

されているそのあいだあいだに、人物の心理や行動がはめこまれているために、しぜんドラマが歴史の因果性をしのぐことはおこりえない。人物の動きは余裕や選択をもつてなされることはなく、たとえ余裕があっても中断したまま、つぎの歴史的事実に移ることで、奇妙な均質性を獲得し、いちじるしく自然らしくなることによって、小説の因果性が歴史の因果性に一致する。

これこそ『ドン・カルロス』の一種独得の効果であり、『クレヴの奥方』などのラ・ファイエット作品には見られないものだといえる。知的で均質な小説であるにもかかわらず、しだいに高調してある種の感動に到達し、「シェークスピア的」⁽³⁹⁾な壮麗美を残すとのクレーのことばも誇張ではなく、刑死させられたドン・カルロスと、毒殺させられた可能性のイスパニア王妃の霊が、ゴメ、ドン・ジュアン、ペレ、エボリ公妃の失脚、ついにはフェリーペ二世自身の奇怪な病いによる死亡という、共犯者らの不吉な運命によって、ついにしづめられたことを結びとして述べるサン・レアルは、冷静な歴史家である仮面を捨てて、十八世紀流の小説家精神——風刺と批判・主張と教訓をかいま見せてくれるのである。

- (1) René Godenne: *Histoire de la Nouvelle Française aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Librairie Droz, Genève, 1970; p. 81.
- (2) (3) *Ibid.*, pp. 80—84.
- (4) 一橋論叢 昭和四十九年八月号 (第七二卷二号) pp. 36—52.
- (5) 筆者は「後期執筆説」に加担したが、晩年説「すなわち一六八〇年代中・後期としたらび」²⁶「*Nouvelle historique* がカギとして重視であるなら」²⁷ 数年以上推定執筆時期を前にするかなければならぬ。
- (6) Henri Coulet: *Le Roman jusqu'à la Révolution*, Armand Colin, 1967; Tome I, p. 244.
- (7) *Ibid.*, p. 243.
- (8) DOM CARLOS/NOUVELLE/HISTORIQUE./Sur la Copie imprimée/A AMSTERDAM./Chez GASPARD COMELIN, 1672; AVIS p. 2.
- (9) *Ibid.*, pp. 161—162.
- (10) *Ibid.*, pp. 214—215.
- (11) *Ibid.*, p. 204.
- (12) *Ibid.*, pp. 176—177.
- (13) *Ibid.*, pp. 216—218.
- (14) *Histoire d'Henriette d'Angleterre*, Michel le Conte, Amsterdam, 1720 (死後初版) に最後の部分としてつけられた ²⁸6°。
- (15) 一五五九年の条約『ドン・カルロス』の原文には Châteaun-Cambresis 246° (p. 6)
- (16) *Dom Carlos*, p. 6.
- (17) *Ibid.*, p. 2.
- (18) *Ibid.*, pp. 2—3.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*, pp. 3—4.
- (21) *Ibid.*, p. 7.
- (22) (23) *Ibid.*, p. 8.
- (24) *Ibid.*, p. 14.
- (25) (26) *Ibid.*, pp. 14—16.
- (27) *Ibid.*, p. 18.
- (28) *Ibid.*, pp. 19—20.
- (29) ~ (31) *Ibid.*, pp. 21—23.
- (32) Gustave Dulong: *L'Abbé de Saint-Réal, Étude sur les rapports de l'histoire et du roman au XVII^e siècle*, Librairie Ancienne Honoré Champion, Paris, 1921; Tome I, pp. 115—165.
- (33) *Dom Carlos*: p. 80.
- (34) *Ibid.*, p. 129.
- (35) *Ibid.*, p. 60.
- (36) (37) *Ibid.*, p. 71.
- (38) *Ibid.*, p. 203.
- (39) Coulet: *op. cit.*, p. 243.